

だ美
よ術
り館

contents

「ジャクエツ・コレクション」展	[2~3]
平成20年度新収蔵品紹介	[4~5]
研究ノート 狩野松柏について	[6~7]
イベント報告	[6]
お知らせ	[7]
貸館情報	[7]
近隣美術館・博物館スケジュール	[8]
「日本の美術館名品展」への出展について	[8]

表紙: 萩原守衛作 「女」 1910年 (「ジャクエツ・コレクション」展より)



JAKUETSU COLLECTION



藤本能道 「色絵かわせみ文磁器八角筥」



横山大観 「聳雲表(しょううんびょう)」

ジャクエツ・コレクション



加藤唐九郎 「志野茶碗 銘 苦屋」



東山魁夷 「秋映」

2009 5/1 金 → 24 日

主催：福井県立美術館

開館時間：午前9時から午後5時まで（入館は4時30分まで）

毎週金曜日は午後8時まで開館（入館は7時30分まで）

休館日：5月11日（月）

料金：一般500円、大高生300円、中小生100円、

30名以上の団体は2割引、身体障害者手帳所持者とその介護者1名半額
（ただし障害者手帳に介護印のある方のみ）

県立美術館では5月1日から24日まで「ジャクエツ・コレクション」展を開催します。

福井県内には優れた美術品のコレクションがいくつかあります。福井県立美術館では、所蔵者が許す限り、これらの優れたコレクションを県民に広く紹介する機会を作りたいと考えています。

今回は、嶺南を代表するコレクションであるジャクエツ・コレクションを紹介します。ジャクエツ・コレクションは敦賀の株式会社



加山又造 「猫」



楠部彌弐 「彩埴春日香炉」

ヨ 展



上村松篁 「初夏」



梅原龍三郎 「薔薇マジョリカ壺」

社ジャクエツが、経営者の徳本道輝氏の審美眼を通して長年収集してきたコレクションです。その内容は豊富で、大きく絵画、彫刻、工芸の三つの分野に分かれます。

例えば絵画の分野では、横山大観、東山魁夷、加山又造等の日本画家や、梅原龍三郎、小糸源太郎、小磯良平等の洋画家の作品、彫刻では日本の近代彫刻の巨人、荻原守衛の代表作「女」、また工芸では楠部彌弐、加藤唐九郎、河井寛次郎、荒川豊蔵の作品等、

いずれも近・現代の美術の歴史を作ってきた重要な作家の作品が中心となっています。

その一部はすでに福井県立美術館や敦賀市立博物館に寄贈されており、これまでそれぞれの各施設で公開されてきました。しかし、これまでジャクエツ・コレクションとしての全貌がひとつの展覧会で紹介されたことはなく、今回は55作家、約70点の作品を一堂に展示し、その収集の軌跡を紹介します。

主な出品作家は下記の通りです。

〔日本画〕 横山大観、東山魁夷、加山又造、上村松篁、徳岡神泉、前田青邨、小野竹喬 等

〔洋画〕 梅原龍三郎、小糸源太郎、小磯良平、岡鹿之助、モーリス・ユトリロ、モイーズ・キスリング 等

〔工芸〕 梅原龍三郎、小糸源太郎、小磯良平等

〔彫刻〕 荻原守衛、澤田政廣

新収蔵品紹介

福井県立美術館の平成20年度新収蔵品を紹介します。20年度は19点の寄贈と48点の寄託がありました。

以下、平成20年度新収蔵品を紹介します。



1. 作者不詳 「酒伝童子図屏風」(左隻)



(右隻)



2. 岡倉秋水
狩野芳崖作「鷹図」模写



3. 岡倉秋水
「悲母観音図」



4. 岡倉秋水
狩野芳崖作「楼閣山水図」模写



5. 岡倉秋水
狩野芳崖作「雪山暮溪図」模写



7. 三上誠 「蓮と少女(下絵)」



8. 鈴木千久馬 「春の福井城址」

[寄贈]

日本画

作者不詳

1. 「酒伝童子図屏風」

江戸時代 (各) 165.2×346.0cm 紙本着色
六曲一双屏風

近世以降、広く一般に親しまれた源頼光が家来の四天王らとともに、鬼神の酒伝童子を退治する説話を描いた作品です。現状は屏風となっていますが元は絵巻であった作品で、絵のみを取り出して屏風に貼っています。酒伝童子絵は古くから絵画化されていますが、本作品は大永二年(1522)に狩野元信によって描かれたサントリー美術館本(全3巻)の系統を引く作品で、大よその図様構成はサントリー本を基本として描かれています。

◎

岡倉秋水

2. 狩野芳崖作「鷹図」模写

大正時代～1950年 109.0×44.0cm 絹本着色 未装

3. 「悲母観音図」

1945(昭和20)年 142.0×56.5cm 絹本着色 軸装

4. 狩野芳崖作「楼閣山水図」模写

大正時代 136.0×61.0cm 紙本墨画 未装

5. 狩野芳崖作「雪山暮溪図」模写

大正時代 129.5×60.0cm 紙本墨画 未装 他1点

6. 雪舟作「山水長巻」複製 (岡倉秋水旧蔵)

※作品画像省略

岡倉秋水は福井県出身の日本画家で岡倉天心の甥に当たります。また狩野芳崖の弟子であり、生涯に亘って熱心に師芳崖の作品の研究をしました。今回寄贈を受けた作品も全て秋水が芳崖の作品を模写したものです。秋水オリジナルの作品ではありませんが、岡倉秋水研究の資料として意味を持つ作品といえます。

◎

三上誠

7. 「蓮と少女(下絵)」

1946年 180.8×180.8cm 鉛筆・岩絵の具にて淡彩・紙

三上誠は福井県出身の日本画家で、戦後の日本画の革新者の中で最も重要な画家です。「蓮と少女」の本画は、すでに当館の所蔵となっている初期の重要な作品で、三上にとってパンリアルで別次元の表現に移る前の、最後の具象の絵といえます。当時三上が思

いを寄せていた久原菊子という女性をモデルに描いたものです。

正方形の画面に蓮が林のように乱立する中、少女の全身像が描かれている下絵は、本画に比べるとかなりの大きさがあります。本画は少女の上半身を中心として下絵の大きさから4分の1程度に切断したもので、他の部分は捨てることができても、ここだけは残さざるを得なかった心情が推察されます。

洋画

鈴木千久馬

8. 「春の福井城址」

1937年 23.8×32.9cm 油彩・カンバス、額装

鈴木千久馬は福井県出身で初めての日本芸術院会員です。初期にはフォーヴィスムの影響を受け黒色を中心とした重厚な作品を描いていた彼は、長い試行錯誤の末、晩年には白色を中心とした独特の様式を確立します。

戦前の福井城址を描いた本作は、画家自身が同じ福井県出身の友人に贈ったもので、小型の画面に比較的自由に福井城址を描いています。



9. 新道繁 「松」



10. 新道繁 「ストーブのある室内」



11. 新道繁 「卓上」



12. 新道繁 「貯水池の松」



13. 新道繁 「松」



18. 五十嵐彰雄 「Drawing by drawing」



14. 豊田三郎 「慈雨」



15. 豊田三郎 「澗」



16. 三田村和男 「気どったラップ」



17. 三田村和男 「マジシャン」

新道繁

9. 「松」

1927年 38.0×45.5cm 油彩・カンバス、額装

10. 「ストーブのある室内」

1940年 61.0×72.3cm 油彩・カンバス、額装

11. 「卓上」

1949年 90.9×90.9cm 油彩・カンバス、額装

12. 「貯水池の松」

1974年 99.5×79.5cm 油彩・カンバス、額装

13. 「松」

1979年 72.7×90.9cm 油彩・カンバス、額装

新道繁は、1960年(53歳)から「松」をモチーフにし、亡くなるまで20年以上「松」を描き続けました。1961年に日本芸術院賞を受賞したのも、前年に発表した「松」の連作によります。そのためしばしば「松の画家」と呼ばれました。

今回の寄贈作品は、全て1990年に当館で開催された「新道繁回顧」展に出品された作品です。また昨年度生地の福井県三国町の「みくに龍翔館」および「みくに文化未来館」で開催された「松の画家 新道繁」展にも出品されたもので、それぞれが各時代の特徴をよく表す作品となっています。

豊田三郎

14. 「慈雨」

2006年 116.7×90.9cm 油彩・カンバス、額装

15. 「澗」

1992年 72.7×60.6cm 油彩・カンバス、額装

豊田三郎は福井県在住の現在100歳の洋画家です。100歳になった今でも旺盛な制作力で、ふるさと美山の山河を現場で描き続けています。つい先頃、県民に元気を与え続けたということで、福井県が設置した「ふるさと貢献賞」を第1号受賞者として受賞しました。

三田村和男

16. 「気どったラップ」

2008年 56.8×47.6cm 不透明水彩・紙

17. 「マジシャン」

2007年 56.8×47.6cm 不透明水彩・紙

三田村和男は紙の上に不透明水彩とマスキングテープで作品を作っている作家です。マチスの切り紙の影響を受け、原色に近い明るい色を使い、デザイン性の強い作品を作ります。2003年の福井県立歴史博物館リ

ニューアルオープンの際にはエントランスに幅11mに及ぶ壁画を制作しました。

五十嵐彰雄

18. 「Drawing by drawing」

1975年 80.5×495.0cm 鉛筆・紙

19. 「Drawing by drawing」

1975年 90.8×436.5cm 鉛筆・紙

※作品画像省略

五十嵐彰雄は福井に在住しながら制作を続けている作家です。彼は、70年代半ばに深刻な制作の行き詰まりを経験し、その結果、広大な紙の上をただひたすら鉛筆で塗りつぶすだけという殆ど宗教的修行のような制作活動に没頭しました。このようないわば自己漂白ともいえる行為の結果残った最小限の素材と時間の集積に意識を向けるようになり、これ以降、徹底して表現を抑え、僅かに残った表現の微に全てを込め、ドローイングと油彩画をフィールドにモノクロームの平面作品を制作を続けています。

今回寄贈を受けた作品は、まさに彼の転換期を示す、紙の上を鉛筆で塗りつぶした作品で、その重厚な質感は、図らずも作品としての圧倒的な存在感を持っています。



をさかのぼること400年ほど前、桃山から江戸時代の初期に、狩野松伯かののうしゅうはくという名の絵師がいたのをご存知でしょうか？知っているとなれば、その(✓)

家事典『古画備考』に、数種の系図を掲げて紹介されています。それによれば本名は直義なおよし、あるいは與市よいち（與一）といい、別に雪川せつせんの号もあったといひます。生没年は(✓)

れたものでしょう。狩野の姓を免許されて法橋ほつきょうの位も授けられたといい、一説に永徳の養子となったとも伝えることから、松伯が師から厚く信頼され、かつ技量にも秀でた絵師であったことをうかがわせます。師没後はその子で永徳の弟でもある長信ながのぶを頼って江戸に下り、最後は越前で没しています。

松伯の活動については不明な点が多く、作品も現在確認されているものは残念ながら皆無です。わずかに後世の模本で「虎溪三笑図」(東京国立博物館蔵)が、同様に與市を名乗った子の作である可能性を含めて知られるに過ぎません。また記録上では慶長10年(1605)に狩野内膳かののうないぜんが公家の舟橋秀賢ふなはしひでかたに、平家物語図制作に際して図様の相談

研究ノート 狩野松伯について

方は“超”画家オタクです。恥ずかしながら筆者も学芸員としてこの美術館で働くまで、その名前すら知りませんでした。さて、その無名の松伯ですが、実は福井とは浅からぬ関係のある人物なのです。

松伯については幕末に編纂された画(✓)

不詳ですが68歳で亡くなったことが分かっています。戦国武将織田信定おだのふさだ(織田信長の祖父)の子の次男として生まれたとする系図もありますが真偽のほどは不明です。絵は狩野永徳かのうえいとくの父である狩野松栄かのうしやうえいに学んでおり、松伯の名も師の名前から付けら(✓)

桃山ルネッサンス 陶芸の近代化

イベント報告

三重県津市に生まれた昭和を代表する数奇者・川喜田半泥子を紹介するとともに、半泥子が桃山時代の茶陶の精神や技術を検証していくなか、おおらかな交流で結ばれた人間国宝たちの作品を通して近代陶芸を展覧する展覧会「川喜田半泥子と人間国宝たち 一桃山ルネッサンスと陶芸の近代化」が開催されました。関連企画として「川喜田半泥子と人間国宝たち展記念講演会」、「人間国宝のお茶碗とともに一服のお茶を」、「担当学芸員によるギャラリー・トーク」が行われました。

■講演会

[日時] 3/8 (日) 13:30~15:30
[講師] 岐阜県現代陶芸美術館館長 榎本徹氏
[演題] 近代陶芸と川喜田半泥子
[場所] 当館講堂

「からひね会」は1942年(昭和17年)に、川喜田半泥子が三重県津市の自宅に美濃の荒川豊蔵、備前の金重陶陽、萩の十代三輪休雪を招いて、今後お互いに家族同然のつきあいをしていこうと話したことが発端となっています。一見したところ川喜田半泥子の私的な集まりのように見える「からひね会」が一体どういうものであったのか、当時の陶芸界の状況を紐解きながら詳しく解説していただきました。また長く萩の研究をされていたため、萩焼の人間国宝・三輪休雪や

その弟である人間国宝・三輪壽雪の興味深いエピソードが次々と紹介され、なかでも半泥子のもとにしばらく弟子入りした壽雪が出した礼状の言葉は非常に印象的でした。「要するに芸術といふものは個性の現れ、人格の発露で、人格完成といふことが

一番大切なことと存じます」。半泥子から作陶に対する根源的な何かを確かに受けとめた、1人の芸術家の姿をそこに見るようでした。

■人間国宝のお茶碗とともに一服のお茶を

[日時] 3/15 (日) 10:00~16:00
[協力] 福井県立美術館ボランティアの会



参加者の皆さんに一服のお茶を楽しんでいただく抹茶席を開催しました。茶碗は十代三輪休雪、金重陶陽、藤原啓の人間国宝作のもの

のと半泥子と親交が深かった小山富士夫作のもので、協力をいただいたのは福井県立美術館ボランティアの会の皆様方です。「幸せでした！」と喜んで帰って行かれるお客様の声をたくさん聞くことができました。

■担当学芸員によるギャラリー・トーク

[日時] 3/7 (土)、14 (土)、20 (金・祝) 14:00~
3/28 (土)、29 (日) 15:30~



短くても1時間、長いときは3時間ぐらいいじりかけて観られる方がほとんどのこの展覧会。本当にやきものが好きな方たちが集まって、やきもの談義に熱中する姿が会場のあちこちで見られました。

ギャラリー・トークでは、来館者の方たちが皆、実際の作品の持つ大胆さ、自由さ、面白さに、関心しきりの反応を間近に見ることができ、あらためて半泥子の作る茶陶の力を再認識させられました。



をし、その使者として秀賢のもとに狩野與一が赴いたことが彼の日記に記されるほか（『慶長日件録』慶長10年正月6日条）、寛永10年（1633）に喜多院（埼玉県川越市）の書院に「鶴亀天山」を描いたことが寺の文書に見えるのみです。

このうち、前者の記録は特に興味ある内容といえます。すなわち狩野内膳は桃山時代の狩野派の有力絵師ですが、松柏同様、狩野松栄に師事していました。つまり松柏とは兄弟弟子の間柄一年代から内膳が兄弟子か一で、内膳の下でその制作を補助する関係であったと思われます。しかも内膳は一説に岩佐又兵衛の師であったといわれる人物です。内膳の父は又兵衛の父とされる武将荒木村重の家臣で、かつ両者は「豊国

こくさいれいずびょうぶ
祭礼図屏風」という同工異曲的な作品を残しています。もし内膳と又兵衛が師弟関係にあったならば、当然内膳の下にいた松柏と又兵衛も既知の仲であったはずで、松柏は先述の通り越前で没し、その子直利も又兵衛同様、三代藩主忠昌に仕えています。一方の又兵衛も元和2年（1616）頃に京から越前に移住していますが、京で絵師として名声を得ていた又兵衛が、様々な面で有利な京を捨てて越前の地へ下ったのには大きな理由があったはずで、そこには作品制作のために福井藩の招き応じたとの見方が有力ですが、さらに想像をたくましくすれば、越前下向の裏には松柏の手引きが少なからずあったと考えることも不可能ではないかもしれません。少なくとも当時は今

の我々が考える以上に、地縁や血縁、師弟関係が重んじられた時代であったことは確かです。ちなみに又兵衛移住の年の4月には内膳が没し、寛永17年（1640）に又兵衛が歌仙図を描いた仙波東照宮は、松柏が障壁画を描いた喜多院の境内社だったのは偶然といえればそれまでですがどこか不思議な縁を感じさせます。

松柏の家系はその後も続き、一つは二代藩主忠直の血統である津山松平藩の御用絵師となり、一つは福井藩御用絵師の奈須家へと受け継がれました。その意味でも松柏の存在は、近世初期の越前における絵画活動に重要な位置を占めており、引き続き調査を行っていきたいと考えています。

（学芸員 戸田浩之）

お知らせ

◎4月～7月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、

4月27日(月)～30日(木)、5月11日(月)、5月25日(月)～27日(水)、6月1日(月)、6月15日(月)、6月29日(月)～7月2日(木)、7月21日(火)、7月27日(月)～7月30日(木)は、休館とさせていただきますのでご了承ください。

貸館情報 [4/2～8/2]

- | | |
|--|----------------------------------|
| 4/ 2～ 4/ 5 ● 第36回「矢われゆく自然・人間」展 | 6/ 2～ 6/ 4 ● MQF第1回パッチワークキルト展 |
| 4/ 2～ 4/ 5 ● “グループ彩”第7回水彩・スケッチ作品展 | 6/ 3～ 6/ 7 ● 第30回萌展(日本画) |
| 4/ 3～ 4/ 5 ● 碧門書道展 | 6/ 3～ 6/ 7 ● 第2回現代童画福井地区展 |
| 4/ 8～ 4/12 ● 第12回ベナール美術展 | 6/ 4～ 6/ 7 ● 第17回福井謙慎木曜会書展 |
| 4/ 8～ 4/12 ● 第17回グループS洋画展 | 6/ 5～ 6/ 7 ● 福井県立藤島高校美術部展 |
| 4/ 9～ 4/12 ● 美山絵画教室展 | 6/11～ 6/14 ● 第59回県書道展・県現代書作家展 |
| 4/15～ 4/19 ● 第9回フォト瞬写真展 | 6/17～ 6/21 ● 第13回グループ「青い扉」パステル画展 |
| 4/16～ 4/19 ● 第24回シルバー福井展 | 6/17～ 6/21 ● 北山歳峰水墨画展 |
| 4/17～ 4/19 ● 第73回くらしの墨画展 | 6/18～ 6/22 ● 第62回示現会巡回福井展 |
| 4/21～ 4/26 ● 土の彩景一坂井和子遊陶展 | 6/18～ 6/21 ● 第23回イーゼル会デッサン展 |
| 4/22～ 4/26 ● 第27回究展 | 6/24～ 6/28 ● 第35回記念福井県水墨画協会展 |
| 4/23～ 4/26 ● 第42回福井玄潮会書展 | 6/25～ 6/28 ● 第24回沙久羅会日本画展 |
| 5/ 1～ 5/ 5 ● 第19回武蔵野美術大学校友会福井支部展 | 6/25～ 6/28 ● 第33回北庄象会展(書法・篆刻・金石) |
| 5/ 1～ 5/ 6 ● 福井光学雑技団小品展 | 7/ 3～ 7/ 5 ● 第28回恵泉書道展 |
| 5/ 2～ 5/ 5 ● 第7回樹ノ会絵画展 | 7/ 3～ 7/ 5 ● 第35回福井県デザインコンクール作品展 |
| 5/ 7～ 5/10 ● 第23回白栴会洋画展 | 7/ 3～ 7/ 5 ● プレアデス会洋画展 |
| 5/ 7～ 5/10 ● 油彩三人展 | 7/ 4～ 7/ 5 ● 第42回福井県学生書道展 |
| 5/14～ 5/17 ● 哀悼を込めて 第11回パレット—JIN作品展 | 7/ 8～ 7/12 ● 第3回スプリングアート展 |
| 5/14～ 5/17 ● 雨森一仁遺作展 | 7/ 8～ 7/12 ● 第25回福井県写真作家連盟展 |
| 5/15～ 5/17 ● 第37回書法研究石門展 | 7/ 9～ 7/12 ● 第50回記念九龍社書展 |
| 5/15～ 5/17 ● 福井愛石同好会展 | 7/15～ 7/20 ● 高橋宣子展 |
| 5/20～ 5/24 ● チャレンジ写真塾第3回写真展 | 7/17～ 7/20 ● JIA北陸支部福井地域会会員作品展 |
| 5/22～ 5/24 ● ふれあいきると青木幸子二十年のあゆみと第8回教室展 | 7/18～ 7/20 ● 第30回記念書玄会展 |
| 5/28～ 5/31 ● 第18回日本画紫陽花展 | 7/22～ 7/26 ● 北陸一陽展 |
| 5/28～ 5/31 ● 第4回笑夢の会水彩画展 | 7/23～ 7/26 ● 第24回日本画爽展2009 |
| 5/28～ 5/31 ● 第12回福井水墨画壇「こころ・趣展」 | 7/23～ 7/26 ● 第45回福井造形展 |
| 5/28～ 5/31 ● 「婆のお針箱」松田香津子 | 7/23～ 7/26 ● 第16回移山会書作展 |
| | 7/31～ 8/ 2 ● 第37回福井県朝日写真展 |

福井県立歴史博物館

福井市大宮2-19-15 TEL.0776-22-4675
休館日:第2・4水曜日

第60回
全国植樹祭2009ふくい
関連イベント
「エコロジースタイル
人と木の物語」

4月25日(土)～6月7日(日)

木は環境にやさしく、魅力あふれる素材です。
木の魅力を存分にご紹介します。
親子で楽しめる体験コーナーも充実!

一般400円 大学・高校生300円
小中学生・70歳以上の方200円

福井市立郷土歴史博物館

福井市宝永3-12-1 TEL.0776-21-0489
休館日:5/7(木)、8(金)、6/15(月)、16(火)、7/6(月)、7(火)、7/30(木)

企画展
「福井城跡発掘展
—福井城下の唐津焼」

5月21日(木)～7月20日(月)

近世初期に流行した唐津焼の
発掘資料を中心に、福井城黎明
期の様子を探っていきます。

一般400円



「福井城跡出土の絵唐津向付」

テーマ展「越前松平家の名品Ⅰ」

5月9日(土)～7月5日(日)

テーマ展「越前松平家の名品Ⅱ」

7月8日(水)～8月31日(月)

一般210(150)円 中学生以下・70歳以上無料
※()内は20名以上の団体料金

福井市美術館 [アートラボふくい]

福井市下馬3-1111 TEL.0776-33-2990
休館日:月曜日および祝日の翌日(日曜日を除く)

『日本近代洋画への道』展

高橋由一から藤島武二まで
—山岡コレクションを中心に—

6月6日(土)～7月12日(日)

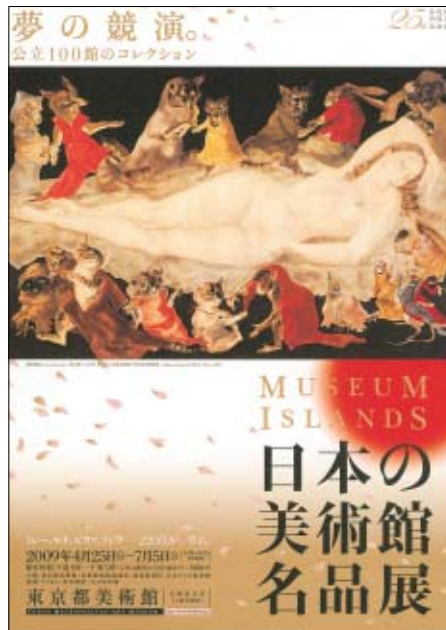
本展では、幕末から明治期にかけて、日本近代絵画の黎明期に活躍した高橋由一を始め、彼に続いて近代洋画の確立を目指した五姓田義松や黒田清輝、久米田桂一郎などによる作品を展示し、日本洋画の草創期の歩みを紹介いたします。本展は、日本ディーゼルエンジン事業の始祖と言われる山岡孫吉氏が生涯に亘って収集した貴重な作品によって構成されます。



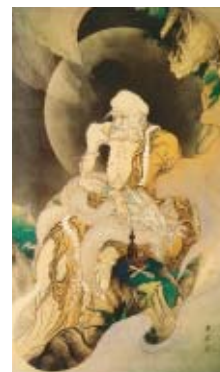
高橋由一「睡園」
1879-80年
笠岡日動美術館

一般900円 大・高生500円
小・中生200円

「日本の美術館名品展」への
出展について



狩野芳崖「柳下放牛図(りゅうかほうぎゅうず)」



狩野芳崖
「伏龍羅漢図(ふくりゅうらかんず)」



下村観山
「馬郎婦観音像
(めろうふかんのんぞう)」



三上誠
「灸点万華鏡1
(きゅうてんまんげきょう)」



三上誠
「灸点万華鏡4
(きゅうてんまんげきょう)」

4月25日(土)～7月5日(日)、東京都美術館で「日本の美術館名品展」(主催:美術館連絡協議会)が開催されます。同展は、わが国初の公立美術館のコレクション展で、洋東西の巨匠の名作約220点が一堂に揃います。

福井県立美術館からは、右記の5点を出展します。

全国から約100館が参加する同展で、当館が誇る珠玉の収蔵品を是非ご鑑賞ください。

なお詳細については「日本の美術館名品展」公式ホームページをご覧ください。(http://museum-islands.jp/index.html)

※会期中展示替えがあります。